

日韓発掘調査交流に参加して

奈良文化財研究所は韓国国立文化財研究所との研究交流協約書にもとづき、国立慶州文化財研究所と発掘調査交流合意書を取り交わしています。私はこの発掘交流のため、2012年9月3日から11月2日まで韓国慶州市に滞在し、新羅支配者層の墓群であるチョクセム古墳群、新羅の王都である新羅王京遺跡、そして統一新羅の代表的寺院として著名な四天王寺跡の調査に参加しました。

つみいしもつかくふん
積石木槨墳という新羅独特の墓制に特徴をもつチョクセム古墳群41号墳、建物や塀の跡が増改築をともなって複雑に展開する新羅王京遺跡、いずれも私にとっては難解そのものでした。それでも、調査スタッフの方々の説明をうけ、様々な作業をこなすうちに、自然と体が遺跡に馴染んでいくような感覚をおぼえたことが思い出されます。これは遺跡の見学だけでは決して味わえないことです。四天王寺跡では、亀趺きふた（亀形の石碑台座）の調査に参加し、亀趺周囲の構造物を調査スタッフと議論を尽くしつつ検出できたことが、交流を通じてのもっとも貴重な経験となりました。

こうして発掘交流生活に慣れていくうちに、発掘調査の基本的な考え方や方法に大差はなくとも、調査過程の個別的状況への対応やその手順等、細部には多くの違いがあると感じました。それらは一長一短、文脈による善し悪しにも思えます。しかし、私たちが発掘現場で当然のごとく考えている事柄を、新鮮な気持ちで見つめ直す機会を得たことは、私にとって最大の収穫であったと思っています。

発掘交流で学ぶことは人それぞれですが、それはこうした機会があつてのこと。今後も発掘交流が続き、日韓の研究交流に重要な役割を果たしていくことを願っています。（都城発掘調査部 森先 一貴）



新羅王京遺跡での実測作業

文化財担当者研修「古文書歴史資料調査管理基礎課程」の開催

2013年1月15日から18日の4日間、奈良文化財研究所の文化財担当者研修として、「古文書歴史資料調査管理基礎課程」を開催しました。

従来は奈文研の研修は埋蔵文化財が対象でした。しかし、近年は建造物や庭園等も扱うようになりました。そこで今回は伝世文化財にまで対象を広げて、古文書・歴史資料の研修を実施してみました。

初めての試みで、応募があるかどうか心配しましたが、定員の3倍にもおよぶ応募をいただきました。全員は受け入れきれず、最終的には19名の方に受講していただきました。内容は、未整理の文書を実際に調査したり、奈良国立博物館の修理所・山城郷土資料館を訪問して修理・古文書調査の現場を見学したり。また、文化庁の地主智彦さんのお話をうかがったり。古文書の専門家でなくても、何ができるのか、ということを考えながらの研修になりました。

文化財を扱う組織でも、古文書の専門家がいらない組織も多いと思います。しかし、古文書等の伝世文化財は、行政への問い合わせも多く、必ず対応しなければならない分野です。我々主催者側も、各機関がそのような問題を抱えながら、個々の担当者ががんばって対応している実態を知ることができました。しかし、そのいっぽうで、今回は研修参加を希望されながら、参加できない方も生じてしまいました。古文書・歴史資料をはじめとする伝世文化財について、担当者同士が交流し、情報を交換しあう場が、もっと必要だと認識した次第です。今回の経験を生かして、今後もこのような機会を設け、古文書・歴史資料をはじめとして、文化財行政を幅広く充実させる必要がある、と思いを新たにしています。

（文化遺産部 吉川 聡）



古文書調査の実習